

万国博覧会の展示と世界観の形成 —1904年セントルイス万博を中心に—

楠元町子
(愛知淑徳大学)

【要旨】

万国博覧会は、1851年に世界で初めて開催されてから今日に至るまで、世界規模の異文化交流の場として、参観者は普段接することの出来ない非日常の世界を目の当たりにする貴重な学習機会を提供してきた。万博の展示は、現代各国が一般的に持たれているそのイメージの形成に大きな影響を与えてきた。本稿は、セントルイス万博の参加国の政府館や展示物の詳細を明らかにし、万博が人々の異文化交流や世界観の形成に果たしてきた役割について考察した。

1. はじめに

本稿は万国博覧会の展示が、人々の異文化交流や世界観形成に果たしてきた役割についての考察を試みるものである。1851年ロンドンで「全人類が現在までに到達した技術、産業、文化を示す」という主旨の下に、世界で初めて開催されて以来今日に至るまで、万博はあらゆる階層、年齢の人々に具体的事物を通じた学習機会を提供し、世界認識の場であった。現代でも一般的に知られている「ゲイシャ、フジヤマ」という日本観が形成されたのも、万博での日本の展示に負うところが大きい。2005年に開催された愛知万博では2300万人を越える人々が集い、未来の技術に驚嘆しただけでなく、直接的異文化交流を楽しみ各国の伝統文化を学ぶ機会となった。生涯学習のあり方を考える上で、万博が市民レベルでの異文化交流をどのように行い、教育機会の一つとして果たしてきた役割とは何であったのか検証することは意義があると思われる。1904年に米国で開催され、教育万博と呼ばれたセントルイス万博は、万博史上初めて「教育館」を建設するなど、教育の重要性に着目した万博であり、世界各国の教育の実態を示すとともに、「未開人」と教育された人間の比較もなされ、教育の成果を視覚的に提示したという点で、特別視される万博であった。

万博に関する主なる研究としては、博覧会を国際政治との関連から論じた吉見の著書¹⁾や、万博を技術史の視点から考察した吉田の一連の研究²⁾がある。セントルイス万博を対象にした研究としては、建築、教育、オリンピックの視点から多くの貴重な研究³⁾がなされているが、セントルイス万博に参加した各国政府館や展示品の考察は不十分であると思われる。

本稿は、セントルイス公立図書館所蔵の未公開のセントルイス万博に関する新聞雑誌記事を集めたスクラップブックや日本政府のセントルイス万博史料等の分析から、各国の万博参加への意気込みを象徴的に表した政府館と展示物の詳細を明らかにし、各国がどのようなイメージを広げようとしたのか、また参観者がどのような世界観を形成したのか考察したい。

2. セントルイス万博の概要

セントルイス万博は、米国が 1803 年にフランスからルイジアナ地域購入後百年を経過したことを記念して、1904 年 4 月 30 日から 12 月 1 日にかけてミズリー州セントルイスの西端に位置するフォレスト公園を中心に開催された。合衆国政府は当初 1903 年に開催を予定し 1901 年 8 月より各国政府に参加を要請していたが、各国の賛同が少なく 1904 年に延期された。日本は民間の商工業者に補助金を支給して参加させる予定であったが、米国の熱心な要請もあり政府として公式参加を決めた⁴⁾。

セントルイス万博は、20 世紀に入って最初の大規模な万国博覧会となり、総面積 514ha（大阪万博 330ha、愛知博 173ha）の会場内に 1576 の建築物が並び立ち、会場内を走る鉄道は 21km に及んだ。「人間の体力の限界を超えた」といわれた広大な会場面積と暑さのため、観客のなかには倒れるものが続出し、試作品として展示されていた救急自動車が活躍し、自動車の実用性を証明することとなった。その後、救急自動車は世界の都市に普及した。参加国は 44 カ国、国内では 47 州 3 都市が参加し、開会日数 185 日間の総入場者数約 2000 万人（うち無料入場者数約 680 万人）、入場料は成人が 50 セント、小中学校生徒その他の児童が 25 セントであった。収入は約 1029 万ドル、支出は約 2452 万ドルとなり、経営的には大失敗の万博となったが、シカゴ・セントルイス間の無線電信の実験や飛行船の実演が行われ、160 台の大量な自動車や自動交換式電話、テレプリンターの出展など高度機械化時代を予告する博覧会となった⁵⁾。

また、アテネ、パリ大会に続く第 3 回近代オリンピック大会が同地で開催され、国際会議として万国学術会議・新聞記者会議・空中飛行会議などが 20、国内会議は 46 開かれ、文化学術においても多くの成果が見られた博覧会であった。身近な発明としては、アイスクリームコーンが初めて登場し、アイスティーを一般に広めた万博でもあった⁶⁾。

セントルイス万博では、「博覧会開設の趣旨は人類の知識啓蒙にあり」と、出品部類目録の筆頭に「教育に関する物品」を置くだけでなく、はじめて教育館を設置した。セントルイス万博の出品部類目録は 15 区に大別され、それらを展示するために教育、美術、心芸 (Liberal Arts)、工業、工芸、機械、電気、運輸、農業、園芸、採掘及冶金、林業漁業及狩猟、人類学館が建設された。また、パイク (pike) と呼ばれた娯楽街では、アルプスの村、ボーア戦争、動物園、世界の創造、巴里、日本村、珍奇亜細亜、カイロ、支那村、シベリア旅行汽車などが建築され多くの入場者を集めた⁷⁾。

3. 各国政府館に見る展示

万博では建築物自体が展示品であった。参加国 44 カ国のうち政府館を建設したのは、アルゼンチン、オーストリア、ベルギー、ブラジル、カナダ、セイロン、中国、キューバ、フランス、ドイツ、英国、グアテマラ、オランダ、インド、イタリア、メキシコ、ニカラグア、ペルシャ、シヤム、スウェーデン、日本の計 21 カ国であった。政府館は各国が自由に自国をアピールする貴重な機会であり、参観者は今まで知る機会のなかった国々の文化・自然・産業を学ぶとともに直接異文化の人と接触する場であった。そのため各国とも次のような異国情緒あふれる政府館を建設し、展示物を説明するために自国民を派遣した。

国名	政府館の特徴	主な展示物
イギリス	英国皇室の主要行事と関係が深いケンシントン宮殿の一部を模造	アン女王時代の家具の陳列室 中央に噴水のある庭園
フランス	ヴェルサイユ宮殿の一部を模造	ヴェルサイユに模した庭園と 20 の彫像、美術や工芸品、セーブル製の陶器の陳列、天井や四壁を華麗な壁画で飾った接待室、精巧な木彫りの家具や彫像の装飾室
ドイツ	フリードリッヒ一世の宮殿として建築したシャロテンブルヒ宮殿の中央部を模造	化学工業品出品陳列室、種々の書籍を備えた読書室、新式の室内装飾の会議室、華麗な織物や金銀器の陳列室
イタリア	古代ローマ式建築、建物の前面にイオニア式の柱列、柱列の両端に勝利の女神の像を配置	イタリア皇帝皇后の彫像、古彫像やボムペイ発掘品の模造品
オランダ	オランダの田舎風建築（レンブラントの住居）を再現	新古工芸品、レンブラント作「ナイトワッチ」（オランダ政府所有）の模写品を展示（観覧料金を徴収）
スウェーデン	16 世紀のスウェーデン田舎風の建築、国産の材木を使用	本国製の家具を配置し、風景画、獣皮を陳列
オーストリア	斬新奇抜な建築	鉄道模型陳列室、諸学校の優等工芸品の陳列室など
ベルギー	ブリュッセルの市庁を模した建築、本国製の鉄骨を使用、円形の屋根に硝子	政府や諸学校の出品、各種の工芸品、植民地コンゴ国産の物産を陳列
メキシコ	スペイン復興期式二層の建築	館内に熱帯植物の温室、大統領ドイヤスノの肖像
キューバ	ハバナ市の住居を模している	天然物を陳列
ブラジル	スペイン風の壮大なる三層の建物	種々の農作物、特にコーヒー、アマゾン川流域産出の木材による家具
アルゼンチン	ブエノスアイレスの政庁の第三層を模造	庭園に熱帯の花、館内に地図や景色、工業品、天産物を陳列
インド	インド・アグラに存在する「エトマド、ドウラア」の廟舎を模造	工芸品の陳列販売、喫茶の席を設け茶やコーヒーの接待
セイロン	カシテーノ寺院を模した建築	館内にセイロン風俗の人像を置き、工芸品の陳列販売や茶の接待
シヤム	首府バンコクのベンチャマ寺の模造	工芸品、楽器、絵画、書籍、家具の模型等すべて帝室博物館蔵品を陳列
中国	溥倫(Pu Lun)皇子の夏の宮殿を模した建物	家具を配置し支那貴人の居室を再現し、種々の工芸品を陳列

日本	政府館敷地全体を日本庭園と称し、御所風の本館、台湾館、金閣（喫茶店）、東屋、眺望亭を建築	本館に古今各時代の服装を着た人形を陳列、日本の風景を再現した庭園
----	--	----------------------------------

（農商務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編、1905年、pp.257-266.より作成）

上記のようにヨーロッパの国々は、イタリアがローマ時代の建物を建築しヨーロッパ文明の源流がイタリアにあることを示そうとしたように、自国が最も輝いていた時代や文化を象徴する政府館を建築した。アジアの国々は、インドがイスラム教、シヤムが仏教寺院を模造したように宗教色の強い政府館、南米諸国は宗主国スペインの影響が強い建築物、一方ベルギーやオーストリアのように斬新な建築様式を用いるなど、各国がどのような自国のイメージを参観者に示したかったのか如実に表している。また館内の展示品も、ドイツが化学製品、フランスが美術品、中国は3000年の歴史を誇る古美術、アルゼンチンやメキシコは熱帯の豊かな農産物などを陳列し、以後の貿易に大きく影響を与えるような物品とともに、その国の特徴を参観者に認識させる効果を狙っていた。

各国の政府館のほとんどは、「博覧会会社事務局及び林業館とスキンカー路との間の平地に在るが、ドイツだけは式場の右方円堂より採掘及び冶金館と教育館との間に至る道の右に在り丘陵の中腹に位置し頗る景勝の地を占めていた。」⁸⁾ 会場の美観の中心であるフェスティバルホールの左方にあり、高台にあるため博覧会の最重要部を見下ろせる好適地に、ドイツは多大な費用をかけ広壯を極めた政府館を建築した。20世紀に入ってドイツの国力が高まりつつあることを、象徴するような政府館の配置であった。

博覧会協会会長フランシス（David R. Francis）は、ヨーロッパの政府館の展示に対して輝かしく洗練された芸術の素晴らしさと伝統ある国の弛みない進歩、南米諸国の政府館の展示に対して豊富な天然資源と急速な進歩を指摘し称賛し、セイロンとインドの展示の際立った特徴として茶の宣伝を挙げている⁹⁾。セイロンとインドの両館は喫茶室を設け、民族衣装を着たインド人に茶の販売や給仕をさせていた。ブラジル政府館は珈琲豆の陳列に力をそそぎ、3階の接待室ではお客にブラジル産の珈琲を供していた¹⁰⁾。このように政府館の展示は、参観者に異文化の人々の生活に接し直接交流する機会を与え、それと展示物とあいまった新たな情報を提供することにより、その国のイメージ形成に大いに貢献した。

西洋風の建築物の中、“exquisite”と評され異彩を放ったのが日本と中国の政府館であり、両国とも本国から大工職人を派遣し、その独特な建築方法や大工の服装は大変注目された。中国政府館の印象について、リパブリック紙が次のような記事を掲載している。「中国政府館は清朝皇族の夏の宮殿を再現した建物と豪華な家具が、多くの参観者を引きつけた。中国政府は多くの人の来場を望んだが、政府館には10人で1グループ形成しないと入場できない規則があり（グループごとに中国人ガイド一名と通訳をつけ館内を詳しく案内した）、少人数のため入場を断念する人も多かった。さらに参観者は中国の建物特有の高い敷居になれていなかったため、部屋に入るのに思わずよろけ、政府館の中国人のガイドの笑いを誘っていた。参観者が『なぜそんなドアを作るのか』と質問すると、『中国人は高く足を上げる運動が好きだ』と中国人のガイドは笑いを隠しながら答えていた。」¹¹⁾ 中国政府は、西洋と異なる中国の文化に誇りを持ち、中国人のガイドと通訳に政府館内を案内させるなど、

米国人に中国の文化を詳細に紹介しようと努力していた。

日本は、政府館の敷地全体を日本庭園と称し、敷地内に御所風の本館や台湾館、金閣寺を模した喫茶店などを建築し、「高い丘の上に建つ日本庭園は独特の珍しい地形で造られ、博覧会で最も絵のように美しい風景の一つである」¹²⁾と米国人に賞賛された。一方米国からセントルイス万博の報告記事を東京朝日新聞に連載していた記者は、「御殿風の白木造りで我々の目には高尚なりとか風致ありというか云うもの、白人の目には少しもこれ等の感じなきのみ」¹³⁾と述べ、日本庭園の素晴らしさは認めるが、庭園内の建物は西洋の政府館と比較して地味であり貧弱であることを嘆いていた。

セントルイス万博の展示の裏側では、利害を反映した経済的な目論みやイメージ形成に強烈な影響を与えた異文化の直接体験があった。展示品とならんで西洋人の好奇心をそそったのは、優劣軸に沿って展示された異文化の人々のパフォーマンスや陳列された存在そのものであった。

4. 万博にみるアジアの展示

(1) 米国の展示と植民地—「フィリピン村」

セントルイス万博の展示の中で最も興味を持たれ人気を博したのが、人間そのものを展示した「フィリピン村」であった。それは、「フィリピンの群島の人々の生活、産業、米国の政策について旅行以上に多くのことを一日で学ぶことができる。」¹⁴⁾と評価され、万博に訪れた人のほとんどが入場したと言われている。

セントルイス万博において米国は、帝国主義政策に基づき、社会進化論と人種差別主義を背景にした悪名高い「人間の展示」を大規模に展開し、米国のフィリピン統治の正当化を意図した広大な「フィリピン村」の展示を行った。「フィリピン村」の広さ 47 エーカーの敷地には、商業館、山林館、人類学館、織物館、教育館、農業館、武器館、兵営、マニラ土人部等が建設され、それら建物郡を取り囲むようにイルゴット族、ネグリト族、モロ族、ヴィサヤン族の集落が広がっていた。さらに外側には、米国士官の下での「教育」(＝教化)によって「文明化された」フィリピン人である警察兵の駐屯地があった。「フィリピン村」全体で、40 の種族 1200 人の植民地住民が実際に居住し、見物人の奇異のまなごしを浴びながらフィリピン諸島の自宅と同じ生活を再現することを余儀なくされた¹⁵⁾。

「フィリピン村」で米国人が最も関心を寄せたのは、犬を食べ、ほとんど裸で生活し、竹で作られた家に住むイルゴット族であった¹⁶⁾。このイルゴット族の展示に対して、「フィリピン人は未開であり、自国を統治する能力がない」という間違っただけの印象を米国人に与えるという批判が起こり¹⁷⁾、米国内で激しい議論となった。「米国の知識人はフィリピンの現状を正しく理解する」という意見や総裁フランシスの判断により、展示は継続されたが、「フィリピン村」を見学した米国人は、イルゴット族とすべてのフィリピン人を同一する傾向があり、各種族の相違やフィリピン独自の文化を理解せず、色彩豊かなアートをフィリピン人が製作したことを信じなかった¹⁸⁾。米国は植民地支配を正当化するため、あえてフィリピンの「遅れている」部分を強調する展示を行った。そのような展示は、単に異文化を”*exquisite*”と捉えるのみならず、米国人に優越意識を育み、近代的西洋と遅れている東洋という世界観を形成する役割を果たした。米国人に文明的に優れている自分たちが、

「劣っている」という国家イメージの人々を導かなくてはならないという使命感を、抱かせる契機のひとつとなったのは間違いないであろう。

(2) 中国の展示と清朝皇族

初めて万博に公式に参加した中国は、中華思想の下に国家の威信をかけて、西洋と異なる文化を前面に押し出した展示を行った。中国は政府館を建設し、心芸館（中国では雑芸館と表記）と教育館に出品した。心芸館では、中国で作られた彫像、磁器、絹、木彫、四千の様々な形の扇、百の異なる様式の小型船が展示されていた。これらの芸術品は万博の終了までに多くが購入され、その後米国の家庭や店に飾られた。またパイクの中国村（フィラデルフィアの商人によって開設された）では、ジャズハウス、ティーハウスや売り場が建設され、劇場では京劇が演じられ、中国の文化が中国人によって示され、大変な人気を呼んでいた¹⁹⁾。

特に米国人が関心を持ったのは、欧米と異なる中国人の生活様式や服装であった。15歳で両親の決めた相手と結婚した若い女性²⁰⁾や、上流階級の女性を象徴する小さく華奢な足や髪型の紹介、中国の高官夫妻の豪華な衣装の説明などが写真入で新聞に掲載された²¹⁾。清朝皇帝の従兄で万博の中国の正監督である溥倫(Pu Lun)は、2ヶ月間セントルイスに滞在し、中国政府館の開館式や総裁フランシスを招いてのレセプションを開催するだけでなく、インディアナポリス地方評議会の婦人クラブ主催の歓迎会に出席するなど米国社会と積極的に交流し、華麗な一行を伴った姿がたびたび新聞で紹介されていた²²⁾。

これらの新聞報道や万博会場の展示物により、中国特有の精巧な彫刻が施された建築物や家具、金糸の刺繍や色彩豊かな服装がその豪華さ、華麗さから米国人の興味を引き絶賛された。しかし中国の展示物は米国の当時の基準からは過去のものであり、纏足や弁髪などの中国の風習は遅れた中国の象徴と見られ、早急に西欧諸国から学び変化する必要性を指摘された。3000年の歴史を誇る中国は印刷と火薬を発明した国であるが、それらの使用方法を発展させたのは西洋であり、2000年間変化していない停滞した国と評価された²³⁾。

(3) 日本の展示—万博とゲイシャ・ガール

日本政府は、海外の万博において名古屋城の金鯢、浅草観音の大提灯、鎌倉大仏の張子、四天王寺の模型等の出品や、1893年のシカゴ万博の平等院鳳凰堂を模した日本館、1900年パリ万博の奈良法隆寺の金堂を模した日本館の建設など一貫して日本文化の独自性を強調する展示をしてきた。1873年に開かれたウィーン万博では、日本は白木の鳥居、奥に神殿、神楽堂や反り橋のある日本庭園を作り、欧州に日本ブームを起こした。

このような中で日本の存在を最も強烈にアピールしたのは、「ゲイシャ」である。日本（江戸幕府）が初めて参加した1867年のパリ万博では、和紙、日本刀、磁器、絹織物などの工芸品を展示し、清水卯三郎の経営による柳橋芸者3人が接待する日本風の茶店が大変な人気となった。芸者たちは、キセルを吸ったり、手まりをついたりし、はじめて触れる生の日本文化はヨーロッパ人に強烈な印象を与えた²⁴⁾。「ゲイシャ」の人気をヨーロッパで不動のものとしたのは、芸者貞奴が1900年のパリ万博のロイ・フラワー劇場で川上音二郎と共に行った公演「芸者と武士」であった。貞奴の演技と舞踊を見た彫刻家ロダンは、

「このサダヤッコの異国めいたダンスは、生き生きとしてすばらしい、完璧なアートであった」と語った。貞奴はその後バッキンガム宮殿で御前公演を実現させ、フランスでは大統領の前で舞を披露し勲章を受けている²⁵⁾。このようなことから、まさに「ゲイシャ・フジヤマ」の日本観が形成されたと言える。

セントルイス万博でも、芸者はたびたび新聞に写真入で掲載された。日本村で興行するために米国に渡った日本芸者による都踊りの一行は「ゲイシャ・ガールズ」と呼ばれて、万博の会場に到着した時から、服装や習慣がアメリカ人の眼を引いた。日本政府はこの芸者の人気を活用し、芸者の品格を保ち、国際的に日本文化としての芸者を印象付けようとした。そのため、日本政府は都踊りの興行の許可について次のように厳しく規制しようとした。「都踊り」の演技者は、第5回内国勧業博覧会の「浪花踊り」に出演した者から選ぶこと、渡米後の住居を限定した上で、政府は日本の恥となるような行動をしないように服装や生活も細かく規定し、博覧会終了後直ちに帰国することを条件として許可した²⁶⁾。

日本村での興行は、芸者の踊りが単調でつまらないなどの理由から不評であったため、都踊りの営業が中止となった。日本政府が、都踊りの一行に帰国を命じたにもかかわらず、芸者16名が帰国を拒否し、中には逃亡を企てる者もあった。日本政府は、都踊りの芸者たちが米国各地に散在すれば、芸者たちの行動により国民の体面を損なうことになること恐れ、米国移民局に要求して移民法の適用により合衆国政府の退去命令で帰国させた。渡航した芸者三十四人の内二人は病死、一人は変死、二人逃亡し、二十九人が帰国した²⁷⁾。この一連の騒動は、「日本政府に対する芸者たちの抗議文」とそれに対して「日本政府が芸者を監視するために警察官を派遣した」ことを伝える記事²⁸⁾や、手に扇子を持ち日本舞踊を踊っている艶やかな芸者の写真とともに「芸者たちが、問題の調停をワシントンの機関に求めた」²⁹⁾ことが新聞に掲載された。これらの新聞報道は、米国人に「ゲイシャ・フジヤマ」の日本のイメージを形成し、こうしたイメージ形成こそ人々にとって「学ぶ」ということであった。

さらに、芸者の営業権をめぐるトラブルが発生した。セントルイス万博では、博覧会会社が日本に関する売店・喫茶店・手芸実施・諸興行等に関する一切の営業権を櫛引弓人に与えていた³⁰⁾。櫛引弓人は、芸者をパイクの日本村の劇場での踊りや芝居、日本茶店での接客係として働かせていた。一方日本政府は、日本庭園内の金閣寺を模した喫茶店で日本女性にお茶のサービスをさせていたが、これは芸者の営業権を犯しているとし、櫛引弓人が「日本庭園の二つの喫茶店、金閣寺と台湾館でお茶をサービスしている日本女性16人をすべてやめさせるように要求した。」これに対し日本政府側は「日本ではお茶を提供するのは常に女性である。」と、ゲイシャとティガールは違うと反論を展開した³¹⁾。日本政府は日本文化を表象する存在として、芸者の価値を高く認めていたのである。

芸者に対する米国での評価は、以下のものであった。金閣寺を模したパビリオンでは、いろいろな色の着物を着た「ゲイシャ・ガールズ」は、小刻みに歩き、しとやかに、西洋の人々がめったに経験しない風味で、日本の香り高い土地から運ばれた美味しいお茶を呈した³²⁾。日本の万博委員が米国の新聞記者を招待した夕食会で披露された芸者の踊りは、「寓話的なシャレード・ジェスチャーで、すばらしいパフォーマンス」³³⁾と絶賛された。日本村の茶屋で接待する芸者については、「ここへ来た見物人は、亜細亜の夢を見る心地が

する。場所といい、給仕といい、三味線の音といい、香の香りといい、一つとして珍しいものはない」³⁴⁾と賞賛された。

貴族院議員金子堅太郎が、セントルイス万博を見学した報告の中で、日本の着物を「高尚優美なる我婦人の服装」³⁵⁾と誇った。日本政府は、芸者は欧米人のエキゾチムを満足させるが西洋に劣る文化でなく、日本を代表する高尚優美な存在であると捉えていた。それゆえ日本政府は、万博のあらゆる場面において、政府館の開館式における芸者による茶の接待や、フラワーショーのパンフレッドに艶やかな芸者の姿を掲載する³⁶⁾などし、芸者を積極的に使い、イメージを保つために国家的規制もしていた。「ゲイシャ・ガール」は、日本という国の高尚な文化を誇るイメージ形成の戦略の重要な役割を担っていたのである。

米国での「ゲイシャ・ガール」の新聞報道や、万博会場において日本政府館で茶の接待をし、「日本村」の都踊りに出演する芸者と直接交流することにより、「ゲイシャ」と日本のイメージが密接に結びついたのである。2000年に中国新聞が日・米・仏・中・タイの5か国で実施した世論調査³⁷⁾でも、「日本と聞いてまず何が浮かぶのか」という質問に対して、米国、フランスでは「自動車」「カメラ」とともに、「芸者」という回答が上位を占めていた。現代でも日本イメージに対して「ゲイシャ」は影響を与えているのである。

5. 万博会場の人々

万博会場の人々について、第一次世界大戦の米国の駐英大使となるジャーナリストのWalter H. Page (1855-1918)の次のような描写は、「学び」の楽しさを彷彿させる。万博ではカンザスの農夫や、マサチューセッツの教師や、話好きで知識欲の高い人などあらゆる階層や地域の人々で満ちあふれていた。ドイツの展示の前では、婦人が「ダイニングルームをすてきにする方法がわかった」と話し、米国の公立学校の生徒の作品を見た二人の子ども連れ若い女性が、「私の夫は、学校の教育委員の一員ですが、実践すべき新しい教育方法を知ることができた。」と述べていた。万博に来た人々は、会場のどこでも何かを学んでいた。ヒントを得られる場所は、常に人ごみになっており、人々は「これはどのように行うのか知りたい。」「これがほしい。」と質問していた。彼らが好奇心を抱いたものは、二つの色で書くことが出来るタイプライターであったり、新しい台所器具だったり、新しい生活のアイデアであったりする。知的好奇心にあふれた人々は、万博を利用して自分たちの生活を高めようとしていた³⁸⁾。

運輸館における日本の展示場も人であふれていた。ここでは、練紙製大日本帝国、韓国全部及北清満州の一部の地理模型を制作し展示していた。この地理模型は、米国では「巨大地図」と呼ばれ大変な人気を博した。日本の解説者が、毎日模型上に日露戦争の戦況を示していたため、参観者の多くは日露戦争の状況に興味を持ち、真剣なまなざしでこの模型を眺め、「満州の都市名や日本の鉄道は何マイルあるのか」などの質問をしていた³⁹⁾。

また、万博に訪れた多くの人々の最大の楽しみは、日頃接することの出来ない品物のショッピングであった。博覧会のオリエンタルの製品のバーゲンデイには多くの女性が殺到し、販売人と値下げ交渉を楽しみながら、「インディアン」やフィリピン人の作成した毛布や、ビーズをつけた財布、ペルシャやブルガリアの麻のバック、カーテンや壁掛けを大量に購入していた⁴⁰⁾。万博を楽しむ大人の姿を如実に表していたのが、異文化と触れあった

非日常の見学に親が夢中な余り、放って置かれた子どもの存在であった。8時の開門時には元気であった子どもたちは、夕方になると疲れ興味が薄れてきたが、親ないし保護者はそのような子どもよりも万博の見学を優先していた。そのため、親とはぐれた多くの子どもたちが、託児施設であったプレイランドに保護される結果となった⁴¹⁾。

1900年の米国の学校在籍率(5~20歳人口に関して)は50.5%であった⁴²⁾。万博は学校教育を受けられない人々にとっては、当時の最先端の技術や世界のさまざまな文化や世界情勢を直接体験的に学ぶことができる貴重な学習機会であった。

6. おわりに

万博に参加した各国は、政府館の建物と展示物を通して自国の最も輝いていた時代にスポットライトを当てていた。フランスのヴェルサイユ宮殿、イタリアの古代ローマ建築は、現在でもその国の象徴である。日本政府は、万博のパンフレットに芸者の絵を用いるなど「ゲイシャ・フジヤマ」の日本イメージの形成に積極的に関与した。欧米諸国は自国の権威と文化を強調する展示、アジア諸国は宗教色の強い展示を行い、各国の明確な意図を持った展示戦略は、その後20世紀の各国の持つ国家イメージを強烈に形成する役割を果たした。また万博の参加国は、展示物を説明するため自国民を派遣したので、参観者は政府館や展示館で異文化の人々と直接交流し、より具体的に異文化の知識を得ることができた。

西欧諸国がオーストリアの鉄道模型やドイツの化学品のように工業品を展示したのに対し、南米やアジア諸国は鉱山資源や農産物の展示が中心であり、万博の展示は参観者に近代的西欧を視覚させる効果があった。セントルイス万博での中国や日本が示した非西欧諸国の展示に対して、米国人は「異質」な点のみに興味を抱き、西洋文化の優秀さを再確認し、世界をリードしていくのはやはり西洋であるという世界観を形成したといえる。

万博は情報量の少ない時代に、一ヶ所に多くの物と人を集め、人々に多様な情報を与える効果はあった。一方万博は、見物人の視野を広げる学習機会となると同時に、展示者の意図や見物人のそれ以前に形成された意識やイデオロギーにより、フィリピン村の展示に見られるように間違ったイメージ形成の危険性もあることを、セントルイス万博の事例が示唆している。

注記・引用文献

1) 吉見俊哉『博覧会の政治学』中央公論社、1992年。

2) 吉田光邦『万国博覧会—技術文明史的に』日本放送出版協会、1985年。吉田光邦編『万国博覧会の研究』思文閣出版、1986年。

3) 畑恵子「セントルイス万国博覧会における『日本』の建築物」(『日本建築学会計画系論文集』第532号、pp.231-238、2000年。渡辺かよ子「1904年セントルイス万国博覧会における『教育』」(『愛知淑徳大学論集』(コミュニケーション学部篇)第3号、pp.149-161、2003年。)小澤英二「万国博覧会とオリンピック大会—1904年セントルイス大会での「人類学の日」をめぐって」(『相山女学園大学研究論集』25、pp.35-45、1994年。)

4) 農商務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編および第二編1905年。

5) 日本経済新聞編『万国博覧会のすべて』日本経済新聞社、1966年、p.44。

6) Thau, R., *The 1904 St. Louis World's Fair 100 Years of Memories* April 2004, p.14.

7) 復刻：永山定豊編『海外博覧会本邦参同史料(第5)』フジミ書房、1997年、p.20。農商

務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第一編および第二編 1905 年。

- 8) 前掲第一編、p.259.
- 9) Francis, D., *The Universal Exposition of 1904*, St. Louis Louisiana Purchase Exposition Company, 1913, pp.313-316.
- 10) *Ibid.*, p.317.
- 11) High Door Sills Worry Visitors, *St. Louis Republic*, May 8, 1904.
- 12) *Scrapbook*, vol.12, p.115, (セントルイス公立図書館所蔵)
- 13) 「聖路易博覧会」『東京朝日新聞』1904年7月19日。
- 14) *The World's Work*, 1904, p.5061.
- 15) Breibart, E., *A World on Display :Photographs from the St .Louis World's Fair*, University of New Mexico Press, 1997, pp.51-52.
- 16) Dog-Eating Igorrotes at World's Fair Threaten Canines in Philippine Querers, *St. Louis Republic*, March 28, 1904.
- 17) Philippine Exhibit a Representative one, *St. Louis Republic*, May 10, 1904.
- 18) Filipino Student Bemoans Ignorance of Americans, *St. Louis Republic*, October 2, 1904.
- 19) Margaret, Johanson, Witherspoon, *Remembering The St.Louis WORLD'S FAIR* 1973, pp.56-57.
- 20) Miss Wong Jin Ying is Only Fifteen but She's Engaged, *St. Louis Post-Dispatch*, July 5, 1904,
- 21) Madame Wong Kai Kah's Costume Greatly Admired, *St. Louis Republic*, July 12, 1903.
- 22) *Scrapbook*, vol.3, p.117, (セントルイス公立図書館所蔵)
- 23) Views of World at the World's Fair, *Globe-Democrat*, July 5, 1904.
- 24) 前掲吉田光邦『万国博覧会—技術文明史的に』p.26。
- 25) 荒俣宏『万博とストリップ』集英社、2000年、pp.25-28。
- 26) 前掲農商務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第二編、pp.684-685。
- 27) 同上、p.686。
- 28) *Scrapbook*, vol.12, p.128. (セントルイス公立図書館所蔵)
- 29) *Ibid.*, vol. 12, p.126.
- 30) 前掲農商務省『聖路易萬国博覧会本邦参同事業報告』第二編、pp.621-623。
- 31) JAPS IN MERRY WAR OUER TEA GIRLS, *St. Louis Republic*, August 16, 1904.
- 32) *Scrapbook*, vol. 12, p.123. (セントルイス公立図書館所蔵)
- 33) *Ibid.*, vol. 12, p.122.
- 34) 「聖路易博覧会日本芸子の評判(上・下)」(7月18日米新聞所蔵として掲載)『東京朝日新聞』1904年8月18、19日。
- 35) 「聖路易博覧会評(続)」(在米金子堅太郎男爵より農商務省に達したる手簡中であつた博覧会概評)『毎日新聞』1904年9月9日。
- 36) *Scrapbook*, vol. 6, p.109. (セントルイス公立図書館所蔵) .
- 37) 「日・米・タイ・中・仏5カ国同時世論調査」『中国新聞』2000年1月16日。
- 38) Walter H. Page, The People as an Exhibit, *The World's Work*. p.5110.
- 39) *Scrapbook*, vol. 12, p.123. (セントルイス公立図書館所蔵)
- 40) *Ibid.*, vol. 7, p.12.
- 41) *Ibid.*, vol. 35, p.54.
- 42) 合衆国商務省編『アメリカ歴史統計』第1巻原書房、1986年、p.370.